九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アダム・スミスの蓄積論（一）

高木，暢哉

https://doi.org/10.15017/4355418

出版情報：經濟學研究. 16 (3), pp.1-16, 1950-11-30. 九州大学経済学会
バージョン：
権利関係：

アダム・スミスの蓄積論（一）

高木暢哉

一　スミスの経済学と蓄積論

スミスの蓄積理論におけるもつとも重要な特質は、それがかれの全学体系の軸心の一つとして提示されていることである。この点はすでに注目され、しばしば論ぜられているところではあるが、しかしどのような意味において、あるいはどのような地位において重要なのか、したがつてそのことからかれの体系それ自身がいかなる様相を帯び、また蓄積理論そのものもどのような内容のものになつているかの理解または解釈については、かならずしも一致しているわけではない。フリードリッヒ・リストはスミスの経済学を「価値の経済学」であると非難して、自己のそれを生産力の国民的理論体系として打出した（Friedrich List, Das nationale System der politischen Oekonomie, 1841.）。その後も、リストにおけると同様に、スミスの理論は単に資本主義社会における合法則的自然的秩序の過程に関する知識の体系の意味において、通常とらえられてきたのであつた（Joseph Schumpeter, Epochen der Dogmen-und Methodengeschichte,—G.D.S., Abt.

I, Th. I, 1914.)。しかしこのような理解の仕方によつては、スミスの蓄積論はもちろん、蓄積論それ自身の本来の意義が、その根本の点ですでに沒却されてしまうことになるであろう。本質的問題の所在の一つが看過されているからである。

なるほどスミスが経済における価値の秩序を問題としたことは確かである。蓄積を取上げて、価値がどこからどのように蓄積されるか、従つてどのように蓄積されねばならぬかの自然的法則をかれは明らかにした。およそ資本主義的経済過程における蓄積を問題とするときには、当然にそのようにせざるをえないであろう。資本主義経済は本来、価値に立脚し、価値に現象されて過程する経済であるからだ。しかし蓄積はもともと、経済において生産力が展開する直接的尖端的な現象的事実にほかならない。資本主義経済が価値の秩序として過程するために蓄積はそこでは、価値の蓄積過程として現われることになるのであつて、根本の生命となる動因がそれを通じて切開かれる生産力の展開であるという、本質的事実は見逃すわけにはゆかない。実にスミスは、かれの蓄積論を、いなかれの全学体系を、そうした基本的認識の上に打立てていたのである。かれの理論は本質的に、リストが自己の体系について誇負したところの国民的生産力の理論であり、これを合法則的に過程する自由な市民的経済社会の価値の事実について展開したものであつたのだ。その場合にスミスの蓄積理論は、かれの生産力理論を基礎づける二つの支柱（分業論と蓄積論）の第二番目のものとして提示され、そのゆえにまさに体系の核心的部分をなすことになつた。それによつてかれの学問は全く清新にして潑剌たる生気と活力とをえたのであるが、他方蓄積論それ自身のがわについても、蓄積本来の内面的動因である生産力理論に基礎をおき、それが発現する

主要素の一つとして提示されているために、内容についても意義においても、いよいよ深められることになつたのである。

スミスの学的体系が本質的に生産力の理論であることについては、すでにしばしば論ぜられているところであるから、ここに再び詳細な論証を行う必要はない。すでにかれの主著の題名によつても察せられるところである。それは「国民の富の性質と原因とについての研究（An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Naions）」と題している。富の性質と原因とを究明することが、「本来の意味での経済学（Political Oeconomy）」の課題であるとスミスはいう（Adam Smith, The Wealth of Nations, ed., E. Cannan, Vol. II, p. 177. 大内訳三巻四六二頁）（なお筆者の考えで訳文を多少変えた箇所が以下に少くない。）。「政治家または立法者の学問の一部分と考えられる経済学は、人民と元首の両者を富ますことを目的とする」（Vol. I, p. 395. 三巻五一六頁）。「豊富と低廉」ということが、スミスによれば経済政策の目標になる。富を獲得し増進しなければならない、一国の生産力を増大させることが必要である。スミスが国富論の第一頁を次の言葉をもつて始めているのは、この書物に寄せるかれの基本となる抱負と所信とを披瀝したものとみるべきであろう。いわく「すべての国民の年々の労働は、本来その国民が年々消費するところのあらゆる生活の必需品と便益品とを供給する資源であつて、その必需品と便益品とは、この労働の直接の生産物であるか、あるいはその生産物をもつて他国民から購入した物である。それゆえ、この生産物またはそれをもつて購入した物の、それを消費する人間の数に対する比例が多い少いに従つて、その国民は、その必要とするあらゆる必需品および便益品を、充分にまたは不充分に供給せられるのである」（Vol, I, p. 1. 一巻一五頁）と。

右においてスミスは、国民の貧富の度合を、その支配する生活の必需品および便益品、今日の言葉でいいかえれば消費財の量と人口との比例をもつて測ろうとする。消費財の代りに国民所得という概念で理解してみても、さして支障はないであろう。国民の所得の根源は、スミスによれば、国民の年々の労働に由来する。労働が本来的に生産し、その所産がそのまま、あるいは他国民との交換を通じて一国民の需要を満すのである。国民を富ますためには労働による生産を増すことが肝要となる。その場合労働というのは、反復される労働、すなわち年々の労働であることをスミスは右において述べている。年々の労働によつて年々の生産物が生産され、年々の消費が行われうる。これは社会的再生産の事実について述べるものにほかならない。一国民が富むということ、すなわち人口に比して生産される消費財の量が増すということは、年々の労働による再生産の規模が拡大するということである。したがつてスミスは国富論において一国一社会における再生産規模の拡大、すなわち生産力増強の方途を求めて全巻の究明を進めようとしていることを、右の発言において宣明しているものと、みなしてよいであろう。

スミスが生産力強化の根源を求め一国の再生産の内奥に迫ろうとしたことは、かれの体系を根底において規定する特質であり、かれの理論に生彩を与え、かれの名を学説史上不朽に止めしめた根本の理由であるように思われる。けだし、経済とは本質において再生産であり、生産力の発展を志向して過程するはずのものなのであるから。いやしくも経済学は再生産を本来の問題として取上げねばならない。経済政策論は生産力の展開を中心に追究すべきである。このことが国富論の主題とされたために、経済学の歴史にとつては、急速に曉の光がさしそめることになつたのである。

その場合に、生産力の展開とは再生産規模の拡大を意味し、後者の拡大は労働生産力の発展および蓄積に負うことは、述べるまでもない。もつとも労働生産力の発展が蓄積の過程に不可分に結びついて実現せられる連関の事実を見落してはならぬが。かくて一般的にいうならば、蓄積こそ再生産の拡大を可能ならしめるまさに主導的な因子であると、いうことができよう。生産力の展開を本来の課題とすべき経済学は、不可避に蓄積論を究極の主題とせざるをえない。蓄積論が解決されるときに経済学は初めて最後的に答えられたことになる。スミスは国富論の第二編において蓄積の問題を取上げている。第一編では分業が論題であり、労働生産力の増強を問題としていた。第一編と第二編とがかれの著書の理論的部分を構成する。したがつてスミスは、かれの理論の体系において、生産力展開のための二つの基本的要素を正しくも全面的に取上げて問題としているわけである。一方では労働生産力強化の方途が分業論の形で論議され、これが交換論・価値論・分配論に展開して価値の自然的秩序が問題となり、他方では蓄積の事実が眞劍なる究明の対象となつた。もつとも後者よりも前者を重視するむねの言葉を残してはいるが。(註一) またかれは前者と後者との連関については別に組織的には論じてはいず、二者は一応切離されて第一編と第二編とで別々に取扱われ、この連関に想到する場合のときどきに、いくらかの記述を与えるという風ではある。それにもかかわらずスミスの経済学が根底において生産力の理論であることは、右によつてみてもいよいよ明白な事実のように思われる。しかもそうした連関において蓄積論が問題とされていることをこそ、われわれはもつとも重視しなければならない。問題は正しくとらえられた上で提起されており、したがつて根幹において解明されているのである。なるほど論述の枝葉に至つては、錯誤もあり、不透明や撞着も少くはない。混乱と錯雜こそは、

その中に珠玉を混えて展開せられる豊穣なスミスの学問のまさに特色ともいうべきものである。むしろ後に展開せられる古典派諸理論のための荒けずりの骨組を巨匠的手腕で打出しているところにこそ、もちろんスミスの学説史上の意義をわれわれは求めねばならぬのである。

（註一）「この供給が充分であるか不充分であるかは、この二つの事情のうち、後者よりもヨリ多く前者に依存するものと思われる。」（Vol. 1, p. 2. 一卷一六頁）

二　資財と資本

スミスが蓄積論をどのような仕方で論じているかを問題としよう。スミスの蓄積論は、その取上げられる独特の仕方にもとずいて、その後の展開が行われている。発端が後続を支配し、帰結を誘導している。この点にかれの蓄積論の一つの重要な特色が見られるばかりか、一般にかれの経済学を支配する基本的思考の方式が示されているからである。

その場合われわれの注意は、まずさきに引用した国富論開卷の言葉に直ちに続く次の章句に向けなければならない。すなわちいう、「しかしながら、この比例はいかなる国民においても二つの異つた事情によつて規定されざるをえない。第一は、その労働の適用上における熟練・技巧ならびに判断いかん、第二には有用なる労働に使われている人々の数とそういう労働に使われていない人々の数の比例いかん、これである」と（Vol. I, p. 1. 一卷一六頁）。国富の大小を規定する要因としてあげられる二つのものは、要するにさきに述べた労働生産力の増進（分業）と蓄積の問題に帰するのである

が、さしあたつては熟練・技巧・判断などによる労働の能力、ならびに充用生産的労働者数の割合というように、單に生産の物理的技術的な直接的諸條件に着眼されて述べられている。ここで労働の諸手段、したがつてそれらの一定の組織連関の中から生ずる労働生産力の増大についてスミスが語つていないことについては、いまは問題としないことにしよう。ともかくもこうして一国民の生産力は直接に物理的技術的な労働過程それ自身の問題として、まず一般的絶対的にとらえられているのである。なるほど労働能力が増し生産的労働者の割合がふえれば生産量も増すであろう。それはいかなる社会、いかなる時代にも通用する普遍的絶対的な法則である。しかし現実の労働過程は、具体的には、歴史的社会的な諸條件によつて制約され、それぞれの特殊相対的な現象形態をとつて現われる。それぞれは特殊な歴史的生産力をもつものである。絶対的物理的生産力が歴史的社会的規定をとつて展開される仕方がつねにわれわれの前面の問題となる。実のところスミスは、初めに超歴史的な物理的技術的生産法則を挙示しておきながら、その立入つた説述の際には、むしろ特殊なる分業社会における相対的な歴史的生産力の法則を取上げて論じているのであつた。あたかも相対的歴史的法則が永遠の絶対的普遍的法則であるかのごとくに。この点は早くもかれの分業論に現われている。

スミスは労働能力を高め生産力を増大させる要因として、もつぱら分業を取上げて問題としたのである。「労働の生産力における最大の改善ならびに労働の方向または適用上に見られる熟練・技巧および判断の大部分は、分業の結果生じたものと思われる」(Vol. I, p. 5. 一巻二二頁)と。分業(division of labour)とは労働する人々の間に成立する社会的関係であるから、分業という生産的社会関係を通じて現象する社会の生産力をスミスはここで問題としているわけなので

ある。ただし特定の歴史的社会の生産力としてではなしに、超歴史的な絶対的物理的な生産力の意味において。けだしスミスにおいては分業という概念がすでに、あるいは技術的に、あるいは社会的に、区別もなしに混同されて理解されていたのであるから。分業の説明のために記したピン製造業の事例（Vol. I, pp. 6-7. 一巻二三—二五頁）は、マニュファクチュア内部の技術的分業を活写したものにほかならない。しかしスミスのもつぱらの関心は、むしろ社会内部の分業にあり、これを明確にせんがためにピン製造業についての考察を行つたものであることは、かれの言葉からも明らかである（Vol. I, pp. 5—6. 一巻二二—二三頁）。農業者と製造業者との間の分業、製造業者の間のさまざまの分業、——こうして問題となる社会内の分業は、しかしながら共同的生産社会の内部に現われる分業をも包括するような一般的な高次の概念ではなくて、スミスにおいては、もつぱら特殊の歴史的社会における特殊の歴史的分業形態が問題とされている。すなわち分業とは交換社会に現われる、スミスの表現に従えば商業社会（commercial society）における特殊な歴史的な交換的分業形態にほかならない。交換が分業を生み、分業が才能を発展させて労働生産力を一そう高め、したがつて分業を発展させる結果になるとスミスは説明する（Vol. I, pp. 15—17. 一巻三八—四二頁）。しかしそのようにいう交換もまた、独立小生産者間の交換、すなわち單純な商品流通における交換について述べられているかと思えば、むしろもつぱら労働力もまた商品として交換される社会、すなわち資本主義社会における交換、したがつてそのところにおける社会的分業が問題とされていることは明白である。資本主義社会といつても、スミスはいまだマニュファクチュア段階のそれに住み、したがつてそうした社会における経済関係を考察の対象とした。マニュファクチュアのもつ劃時代的な生産力に目を奪わ

れ、かれはまずその内部に現われる分業の技術的生産力について論述せざるをえなかつたのであろう。しかし思考は直ちに広げられて、そのマニュファクチュアを成立たしめる歴史的社会的基盤である交換的経済関係が問題となり、しかももつぱら労働力もまた商品化されている拡大された流通経済がかれの究明の中心的対象となつた。分業は技術的に取上げられ、社会的に展開され、さらに高次の分業的社会関係が問題とされ、その生み出す生産力の偉大さが立証されてゆくわけである。これとまさに同様の仕方で蓄積に関する論考もまた進められていることを指摘しようと思つて、われわれは右のように記してきたのであつた。

生産力を増大させる第二の要因として挙げられた充用労働者数の割合が、第二編においては蓄積論の形をとつて展開されているのであるが、それは生産的労働者を扶持するためには一定の手段の保有が必要とされるからである。予め用意される扶持のための手段の量が、充用する生産的労働者の数を決定し、したがつて生産量を決定する。「ある国民において、その労働の適用上における労働の熟練・技巧および判断の実状がどのようであれ、同じ状態が続いている限りにおいては、その国の年々の供給が充分であるか不充分であるかは、有用なる労働に使用されている人の数とそういう労働に使用されていない人の数との割合に、依存せざるをえない。有用にして生産的なる労働者の数は、……いかなる場合においても、かれらを働かせるために使われるところの資本的資財（capital stock）の量に、それが使用されるところの特殊な方法に、比例するものである」（Vol. I, p. 2. 一巻一八頁）と。こうして問題は蓄積論に移されてゆくことになる。ところでこの場合蓄積されるものはなんであるか。右の章句においては、資本的資財（capital stock）という言葉が現われて

いるが、他の場合では二語に切離されて、資本（capital）または資財（stock）なる言葉が多く使用されている。これらの意味および区別をまず明確にしておかなければならない。

スミスは stock, cspital, capital stock の言葉をかならずしもつねに明確に区別して使つているのではない。とくに第一編においては、しばしば stock という言葉を用い、概して「ある営業の利潤の計算される基礎」といつた程度の広い意味に解している（大内訳二巻五頁訳者註）。それが資本の性質および蓄積を直接に問題とする第二編に至つて、ストックとキャピタルとに対して明確な概念上の区別がなされているのは、そこでの問題が、もはや概念をあいまいな姿で放置しておくことを許さなくなつたからであろうか。スミスは次のように考えている。まず人がある特定の時期に保持する土地以外の一般の貯財を広くストックと概念する。これを大内教授は「資財」、「資財の貯え」あるいは單に「貯え」と訳しておられる。ところでキャピタル（資本）というのは、ストックの一部であり、その特殊の在方にほかならない。個人の「資財は二つの部分に分たれる。收入をかれに与えるとかれが期待するこの部分は、かれの資本（capital）と呼ばれる。他の部分はかれの直接の消費を満す部分である」（Vol. I, p. 261. 二巻一〇頁）と。個人の資財を総合したものが「一国または一社会の総体の資財」であり、したがつて社会の総体の資財もまた、本質的には、二つの部分に分たれる。個人の「直接の消費のためにとつておかれる部分」と資本とに（Vol. I, pp. 263 —. 二巻一四頁以下）。こうしてスミスは、用いられることによつて收入（revenue）または利潤（profit）を生むところの資財を資本と呼ぶことによつて一般の資財と区別しているのである。つまり資財と資本とは、全体と部分、一般の機能と特殊のそれとの区別ということになる。

ここにいう資本の特殊の機能とは、もちろん收入または利潤を生むということをさすのであるが、資本の概念が本質的に利潤との相関に成り立つことは、スミスの明確に意識するところであつた。かれは資本の特性として、一定額の資本は一定額の利潤（自然率における利潤）を生まねばならぬことについて述べている。(註一) それ自身物理的に規定された自然物にほかならない生産のための諸手段、すなわち資財が利潤を生む資本になるということは、もちろん特定の歴史的社会においてのことである。スミスの表現にしたがえばストックが蓄積され土地の私有が始まると、「労働の全生産物はかならずしも労働者には帰属しない」（Vol. I, p. 51. 一卷一〇三頁）で、一部は利潤の形で資本家に留保されることになる。資本主義社会に至つて初めて利潤なる所得が生じ、したがつてそれを目的として用いられる諸手段が資本となるわけである。自然的技術的な條件が一定の歴史的社会的関係におかれるときに資本として機能するという、そうした歴史的社会的規定を、資本の概念においては問題としなければならない。しかしスミスは、この点を別に明確に意識して論じているのではない。第二編の序論に資本の発生について記している歴史的論述があるから、これを檢討してみよう。

（註一）「資本の利潤は、監督および指揮の労働の数量・激しさ、または工夫となにら比例するものではない。それは全く、使用される資本の価値によつて規定されるもので、その大小はこの資本の大小に比例するものである。」（Vol. 1, p. 50. 一卷一〇二頁）「もしかりにかれがかれの附近における普通率の利潤がえられないほど安い価格で売るとすれば、かれは明らかに商業上の損失者となる。けだしかれにしてその資本を他の方法に使つたならば、かれはそれだけの利潤はえたに相違ないからである。」（Vol. 1, p. 57. 一卷一一四頁）

それによれば、分業も交換も行われない未開の社会においては、「あらかじめなにかの資財（stock）を蓄積または貯蔵する必要はない」（Vol. I, p. 258. 二巻六頁）。必要は分業が行われるようになつて初めて生ずる。「織工がかれ自身を完全にかれの特殊な業務に委ねうるためには、かれがかれの織物を完成するのみならずそれを売却するまでの間、かれ自身の所有でもよくまたは他人の所有でもよいが、かれの生活を維持し、かれにかれの仕事の材料と道具とを供給するに足るだけの資財が、どこかにまずもつて貯積（store up）されていなければならない」（Vol. I, p. 258. 二巻七頁）。「資財の蓄積は事の性質上、分業に先行している必要がある」（Vol. I, p. 259. 二巻七頁）。この場合スミスが、資財の集積を交換的分業社会の固有の現象とみる点については、もちろんわれわれは反対しなければならない。それ以前の共同的生産社会においても、いやしくも再生産が維持され、その拡張が行われうるためには、資財の貯えの必要なことはあらためて述べるまでもない。一定の資財の保持は再生産進行のための條件であり、それ以上の資財の保持は再生産の拡大、すなわち蓄積にとつての條件となる。それが分業的交換社会においては、独立の個別的生産者が蓄積の主体となつて現われ、かれらがこれを自己の計算において行う。もちろん資財は原則として市場から購入し、それを用いて作つた生産物もまた商品として市場に販売する。資財は流通的市場経済関係による規定をうけるのである。さらに進んで、労働力もまた商品となるに至つた流通経済、すなわち資本主義社会においては、資財は商品としての規定のほかに、利潤を收得する資本としての性格をえる。物としての單なる資財は、こうして交換的社会関係による規定のうえに資本となり、三重の規定をもつわけである。それをスミスは、單純にも分業的交換関係との連関において大ざつぱにとらえ、したがつてその歴史的社会

的意義や発展的連関については深い考慮も加えず、しかも資本を本質的には依然として自然的技術的に單なる物としての生産手段とみる見解を終始離れることができなかつた。それは分業論におけると全く同じ思考の方式であり、それを裏書する事実としてさらに次のような論述も残している。すなわち、——

資財の蓄積が進むにつれて、労働の細分は進み、労働生産力は向上し、労働の加工する材料の量も増加してゆく。こうして「分業が進むに従つて、同数の職工に不断の仕事を与えんがためには、従来と同量の食料品のストックと、未開の狀態において必要であつたのに比べてヨリ多くの材料と道具のストックがあらかじめ蓄積されていなければならない」(Vol. I, p. 259. 二卷七—八頁)。このようにいうスミスは、分業については、それを技術的にも社会的にも概念し、資財の蓄積については、單なる自然的素材および分業的社会関係の二重の見地から眺めていることは明らかである。さらに資本主義社会における蓄積が、記述内容の実質的中心となつていることも疑いえない。それは続いて記されている論述にみても、また一般にかれが資本の蓄積について述べる全体の調子からいつても、否定できない事実である。

実のところスミスは、マニュファクチュア段階のそれではあるが、資本主義的蓄積の事実をつねに解明の究極の課題としていたことは明白である。理想的に過程する資本主義経済においては、すべては資本によつて生産され、物財は資本としての規定をうけて資財となる。賃銀・利潤・地代のごとき所得も資本による社会的生産過程から分配面に生ずるその一つの分枝にほかならない。それが消費的家計の保持する消費的財貨の貯財の形で現われてくる。これに反して残りの部分は、再び資本として生産過程に投下され、したがつて社会に存在する資財の保有は、資本として機能する部分とそうでな

い單なる資財との二部分に分れることになるわけである。スミスが一国における資本と資財との区別について行つた既述の説明は、右のごとくに解するときに初めてその眞実の意義が明らかとなるように、わたくしは思う。

資本主義社会における蓄積を論じて、その歴史的社会的意義と連関とを明確に意識して規定することができなかつたのは、もとよりスミスの弱点である。歴史的に相対的な資本主義的蓄積過程が自然的絶対的なものとして述べられており、したがつて資本もまたそのような仕方で規定せられた。利潤を生むという資本の社会的歴史的特質が、あたかも物としての資本に内属する自然的物理的属性であるかに絶体化されている傾向がある。すべて資本にはその価値に比例する一定の利潤が与えられねばならぬとスミスはいう。(註一) 自然率における利潤は、同じく自然率における地代および賃銀と合して自然価格を構成する（Vol. I, p. 57. 一卷一一三―一一四頁）。生産費説であり、スミスの価値論におけるいわゆる支配労働説あるいは構成部分的見解と呼ばれるものに関連する。それは後来する古典派諸学者の間に多くの理論上の混乱と紛糾とをひきおこす原因となつたが、もとを正せばスミスの素材的資本観がその種をまいていることは疑いえない（拙著利子学説史三九四頁以下）。素材的資本観は、先行する重商主義学説にみられる流通主義資本観に対立する。商業的に單なる貨幣関係あるいは流通関係の中に資本の根本の意義を求めるのではなくて、スミスはそれを資本が素材のままで働く直接の生産過程について究明した。資本が雇う生産的労働者は資本として提供される原料に労働の価値だけを附加し、その価値は資本が蓄積され土地の私有されている社会においては、賃銀・利潤および地代に分解することをスミスは述べている（Vol. I, pp. 50-51. 一卷一〇一―一〇四頁）。利潤が価値の控除であること、そして価値の根源は労働にあり、その労働

を扶持するものが資本であることを明らかにしている。これはスミスの理論のもう一つの重要な要素である投下労働説あるいは分解部分的見解として知られる主張である。そこでは相関的連関に立つ資本と利潤との二つが、生産手段と労働者との結合の、したがつて生産過程それ自身の、特殊なる歴史的社会的規定に依存することが示唆されている。スミスの素材的資本観は、一方では生産費説や支配労働説へと誘つているが、他方ではこうして生産過程の分析を深めることによつて資本関係についての本来の認識に迫つていることは否定できない。

（註一）「雇主は、その製作物の売却が資本を回収するだけに止まり、それによつて雇主みずからなにら得るところがないならば、これらの人々を雇うことに何の興味も持たないはずである。そしてまた、もしもかれの利潤がかれの資本の大さに対して一種の比例を保たないならば、小資本よりも大資本を用いることについて、かれは何の興味をも持たないはずである。」（Vol. 1, p. 50. 一巻一〇二頁）

もつとも資本は関係であるまえに直接的には素材である。このことは歴史を超えて妥当する資本の根源的自然的規定であるから、素材的資本観はこの点に関する限りは、まさに資本の第一次の概念を指摘したものにほかならない。ところで素材は一定の歴史的社会的関係におかれるときには資本となり、その場合の関係がスミスによつて分解部分的見解の形をとつて示されることになつたのである。ただし依然として資本はもつぱら素材としてだけの規定を与えられたまま。他方スミスは、資本による再生産過程が反復回帰する過程の究極に生産費法則が実現せられる流通の事態に着眼し、変化しない静止状態の経済は自然的であるとして絶体視し、これに絶体的自然的素材としての資本が結びつけられることによつて

構成部分的見解が現われるに至つた。もとよりスミスが資本を素材とみる立場から離れることができなかつたのは、資本の生産過程に理論上の最後の足場をおいているスミスの根本の態度に照応するものであつて、これによりかえつて重商主義理論の流通主義的偏見を是正することができた。しかし他方では特殊の歴史的相対的な社会関係が無規定のまま放置され、資本の展開される各局面での形態や特質が組織的に解明されることはなかつた。かくてそのまま錯雑となり矛盾となつてスミスの理論の中に内包され現象することになつたのである。（未完）

附記　本稿は昭和二十五年度学術振興会補助による「古典学派蓄積理論研究」の一部である。